

大患難

「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」(マタイの福音書24:21)

終りの時代に起こる特別なしるしについて主イエスはマタイの福音書24章15節から話し始められた。これはしばしば「大きな患難」(時代)と言われているものである(黙7:14, ⇒マタ24:21の「ひどい苦難」も同じギリシヤ語)。ここで起きるしるしは今の時代の終りが近づいていることを警告するものである(マタ24:15-29)。また患難の後にキリストが肉体をもって地上に再び来られることにつながるもので、その合図になるものである(マタ24:30-31, ⇒黙19:11-20:4)。キリストが来られると反キリストと悪の勢力を滅ぼし地上を1,000年間平和に治められる(→「終末の事件」の表 p.2471)。

患難の始まりの合図になる最初の大きなしるしは「荒らす憎むべきもの」である(マタ24:15)。このことばは、キリストが実際に地上に来られることが非常に近いことを神に忠実に従う人々(患難時代に生きている)に教える明らかな事件を指している(患難時代にキリストに従う人々は教会の忠実な人々がこの世界から引上げられた後にキリストを受入れた人々のこと, →「携拳」の項 p.2278)。この明かなしるしまたは事件は、第一に将来エルサレムのユダヤ人の神殿が反キリストによって汚される(冒瀆、悪用、乱用)ことを指している(→ダニ9:27注, 1ヨハ2:18, →「反キリストの時代」の項 p.2288)。反キリストまたは不法の人は自分が「神」であると宣言して神の神殿の中に自分の像を立てる(Ⅱテサ2:3-4, 黙13:14-15)。次のことはこの後に続いて起こる事件への転機になる重要なことである。

(1) 「荒らす憎むべきもの」は患難の最終段階の始まりを示す。その患難はキリストが地上に再び来られて、ハルマゲドンの戦いで反キリストの勢力に勝利し、神を敬わない人々をさばいて滅ぼすことによって終結する(マタ24:21, 29-30, ダニ9:27, 黙19:11-21)。

(2) この事件が起こる時を注意していれば(マタ24:15の「読者はよく読み取るように」)、患難時代のキリスト者たちは患難がいつ終り、いつキリストが来て地上を治められるかを非常に正確に知ることができる(→マタ24:33注)。この事件と終りとの間には3年半または1,260日あることを聖書は4回も記録している(→ダニ9:25-27, 黙11:1-2, 12:6, 13:5-7, →ダニ9:25-27各注)。

(3) キリストが来られることを待っている人々は、熱心に期待するあまり(マタ24:33)キリストが既に来ておられるという知らせにだまされないように注意しなければならない(マタ24:23-27)。患難の終りに「人の子の来るのは」、目に見えるかたちで世界中の人々がみな知ることができるほどはっきりしたものである(マタ24:27-30)。

大患難が始まったことを示すもう一つのしるしは、「大きなしるしや不思議なこと」を行うにせ預言者、サタンの使いが出現することである(マタ24:24)。

(1) 主イエスは弟子たちに偽りに警戒し身を守るように強く警告された。「キリスト教」の預言者、教師、牧師であると自己主張する多くの人々がたとい奇蹟や癒しやそのほかのしるしを行っているように見えても実際は偽善者でありうそつきであるかもしれない。その働きは成功しているように見えるかもしれない。けれどもにせ預言者たちは神のことばの中にある真理ではなく、それとは違う、変えたり曲げたりしたメッセージを伝えるのである(→マタ7:22注, ガラ1:9注, →「反キリストの時代」の項 p.2288)。

(2) 聖書は教師、指導者、説教者などを動かしている「霊・・・を、ためし」、そのメッセージ、働き、生活が神の永遠のみことばの教え、原則、基準に合っているかどうか調べるように、キリスト者に勧めている(→1ヨハ4:1注, →「にせ教師」の項 p.1758)。このような奇蹟を伴う偽り(真理を正しく伝えない)が存在することを神は許しておられるけれども、それは信仰者を試して神への愛の深さと質、そしてみことばの

真理に対する忠誠心をはっきりさせるためである(→申13:3)。この偽りの時代は非常に困難な時期である。主イエスはマタイの福音書24章24節で終りの時代には宗教的偽りが広がり、巧妙に伝えられるので「選民」(熱心なキリスト者)さえも真理とうそを区別するのがむずかしいだろうと言われた(→1テモ4:16注、ヤコ1:21注、「選びと予定」の項 p.2215)。

(3) 神の民の中でも真理を本当に愛していない人々はだまされてしまう。反キリストが来るとキリストの真理を信じて受入れる機会が奪われてしまう(→Ⅱテサ2:11注)。

最後に、大患難は世界中の人々にとって恐ろしい苦しみと悩みの期間になる。反キリストが世界を支配し神が終りのときの厳しいさばきを下されるこの恐ろしい時期について聖書は次のような事実を挙げている。

(1) それは世界的である(→黙3:10注)。

(2) それは人類の歴史の中で最悪の苦しみと悩みのときである(ダニ12:1、マタ24:21)。

(3) それはユダヤ人にとって恐ろしい迫害のときである(エレ30:5-7)。

(4) それは「不法の人」(反キリスト →ダニ9:27、黙13:12、「反キリストの時代」の項 p.2288)が支配する期間である。

(5) キリストの教会の中の忠実な人々はこの時代が始まる前に患難から救い出され、「のがれ」と約束されている(→ルカ21:36注、Ⅰテサ5:8-10、黙3:10注、→「携拳」の項 p.2278)。

(6) この期間にはイエス・キリストを信じて霊的に救われるユダヤ人や異邦人(ユダヤ人以外の人々)がいる(申4:30-31、ホセ5:15、黙7:9-17、14:6-7)。けれども患難が始まってからキリストに頼るようになった人々はこの後に起こることを耐え忍ばなければならない。

(7) それは神に対して忠実であり続ける人々にとって大変な苦しみと恐ろしい迫害のときである(黙12:17、13:15)。

(8) それは全世界の神を敬わない人々に対する神の怒り(正当化された怒り、報復)とさばきのときである(Ⅰテサ5:1-11、黙6:16-17)。

(9) その日数は少なくされると主イエスは言われたけれども(マタ24:22)、予告された3年半または1,260日より少なくなるということではない。むしろその期間が非常に恐ろしいので日数が限定されなければだれも生き残れない、つまり全人類が滅ぼされてしまうという事実を示されたのである。

(10) 大患難はイエス・キリストが花嫁(既にキリストとともに天にいる人々つまり教会 黙19:7-8、14)と一緒に栄光の姿で地上に来られることで終る。それは患難時代に主イエスを知りそのときまで生き残っていた人々を救い出すためである。帰って来られたキリストは、神の民であるイスラエルに向かって集まってきた反キリストの勢力をハルマゲドンの戦いで破られる(黙16:16)。そしてすべての邪悪な人々に対して最後のさばきを下される(エゼ20:34-38、マタ24:29-31、ルカ19:11-27、黙19:11-21)。

(11) 大患難の時代の終りに主イエスが来られることと、マタイの福音書24章42、44節で言われた突然に思いがけない時に天から降りて来られることを混同してはならない(→マタ24:42注、44注 この来臨は患難時代の終りに最終的に地上に来られる前に起こる教会の携拳を指している)。患難の前に突然来られて教会を世界から引上げられることはキリストの再臨の「第一段階」とされている。大患難の終りに肉体をもって地上に来られることはキリストの再臨の「第二段階」である。

(12) 7年間の患難全体を描く重要な聖句は黙示録6-18章に見られる。

患難時代全体は7年間続く。その期間中に反キリストは政治的権力を握る。けれども完全に姿を現す、あるいは全世界を支配するのは後半の3年半になってからである(→ダニ9:25-27、黙13:5-7)。この後半の時期は上に挙げた特異な事件が起こるので、特に大患難と言われている(→「終末の事件」の表 p.2471)。